# 山之口流　スーパー書斎術

（文藝春秋『オール読物』　2004年7月号所収）

## ○「書斎」に憧れた旅路の果て

### ・「書斎」の夢

　本好きなら誰しも、理想の「書斎」を夢見たことがあるだろう。

　愛しい本たちとともに暮らす日々、そのための快適な空間を夢見ながら、狭い部屋での本の整理に悩み、転勤や異動であわてふためく。僕もまた、そうした「書斎難民」の一人だった。

### ・はじめての家

　はじめて買った大阪府枚方市の家は、マッチ箱のような文化住宅で、それでも憧れの「書斎」を手に入れたと舞い上がった僕は、二階の半分を占める六畳間一杯に所狭しと本棚を並べた。まさに書痴である。ところがほどなく、二階の床と壁の幅木の間に一センチ近い隙が開きはじめ、ある夜、バキッという無気味な音に驚いて飛び起きた。根太の一本が折れたのだ。いくら本好きと言っても、中島敦の『文字禍』じゃあるまいし、本と心中はしたくない。あわてて半分以上の本を横浜の実家に送りつけ、ようやく事なきを得た。

　それが躓きはじめだったらしい。それから十年というもの、こと「書斎」に関してはまるっきりツキがなかった。

### ・新幹線通勤

　やがて横浜に転勤し、会社で新幹線通勤が認められたのを機に、静岡県の富士市に、二度目の家を持った。今度は新築とあって、思うさま理想を追究したため、ホタテ貝のように書斎の横と上に他の居住スペースがはりついた、いびつな間取りになった。だが、結婚が原因で、そこでの「書斎」との蜜月も二年足らずで終わった。妻は都会でなければ暮らせない人間だったから。僕ら夫婦はそこを貸家にして、東京に舞い戻らなくてはならなかった。

### ・板切れ一枚の「書斎」

　だから、小説を書き始めた七年前、憧れの「書斎」はいつまたかなうかもわからない状況だった。本への需要も渇望もいや増しているのに、その大部分は地下鉄のガード下（変な言葉だが）にあるトランクボックスで、鼠とカビに脅かされている。読んだ本を手にとって確かめられないのが、なんとももどかしい。新人賞に応募した小説を書いた「書斎」は、部屋の隅の二台の本棚に斜めに掛け渡した板の上か、通勤電車で膝の上に置いたノートパソコン、それに昼休みの社員食堂というありさまだった。おかげで、それらが意外なほど集中できる執筆の場だと気づいたのは怪我の功名だったが。

### ・新人賞獲得

　ある新人賞で、大金にはほど遠いけれど、可処分所得としてはまとまった金額を手にしたとき、まず頭に浮かんだのは、これでまた本たち全員の顔を見ながら暮らせるという思いだった。書斎のことではさんざんな目に遭いながら、われながらこのけなげさはどうだ。

　このときの「書斎」には、ただ本と過ごす場所と言うだけでなく、さまざまな甘く、観念的で、悲壮な思いが――大げさに言えば「生涯一書斎」とか「終の棲家」という感じかまとわりついていたように思う。

### ・あこがれの「書斎つきの家」

　こんな煮詰まった思いは、かなえてやらねば治まらない。サラリーマン生活最後の特権を行使し、住宅ローンを借りまくって、千葉県の市川市に三度目の家を構えた。二度目の富士の家から、ほぼ十年ぶりである。

　なにしろ「生涯一書斎」だから、家族の思いをよそに、本のための空間は最大限確保した。後で触れる「移動書斎」のガレージを含めると、「書斎」と「書庫」だけで一階のフロアを占領したことになる。つまり一階には本、二階に母親、三階に親子三人が住む。大阪の家での恐怖体験から、書庫には木床のすぐ下面までベタ基礎を流した。おかげで象が乗っても抜けやしないが、冬の最中はスケートリンクのような寒さである。歳を取る前に対策を講じねば。もし僕が本など読まず、まして書かない人間であったら、三階建ては二階で済み、住宅ローンを組まなくても済んだ計算になる。本好きの人間に本が与える負担は、かくも重い。

### ・本の山に埋もれた青春

　一階は、読み書きをする「書斎」と、本、ＣＤやＭＤ、ビデオ、その他一切の資料を置く「書庫」に分かれている。「書斎」は四畳余りの和室で、窓際に作りつけた机の下がコタツのように掘り下げてあり、座椅子で読み書きする。「書庫」は十二畳半あるから、宿願通り、手持ちの本をすべて並べても、まだ多少の余裕は残る。その作業を終えたときは、前半生がこの書庫のためにあったような、青春が本の山に埋もれているような、何とも言えない気分だった。

### ・旅路のはて

　だからここは、高校時代から書斎というものに憧れ続けた旅路の果てである。とは言え終着駅ではなく、折り返し点。折り返し点までの往路の話は、本好きなら誰でも似たり寄ったりだろうから、これ以上やっても書斎自慢にしかならないだろう。

　問題は折り返し点から先、往路の人生経験を活かして切り開いてゆく復路の話であるはずだ。まして、「スーパー書斎術」の看板を掲げるからには。

## ○「書斎」から「スーパー書斎」へ

### ・幻滅からはじまる

　みんな悩んで大きくなった、ように、「スーパー書斎」への飛躍は、実は「書斎」への一種の幻滅から始まる。

　僕はまだ松下電器産業に勤めながら、毎日、深夜までかかって二作目の長編（『われはフランソワ』新潮社）を書き、三年前、四十歳を過ぎたのを機に退職した。無茶をすると思う人もいるだろうが、ともかく、自分の人生の構造を考え、改革しようとしたら、僕にとっては会社が不要になっちゃったのだ。これこそ本来の「リストラ」じゃないか。

　ところが、いよいよ専業になって三作目の長編（『瑠璃の翼』文藝春秋）に着手し、昼間も書斎に籠もる日々が続くと、しだいに、この生活もいいことずくめではないことが身にしみてきた。

　運動不足で肥満が進み、胃が痛むことが多くなった。とんと縁が無かった腰痛なるものを初体験した。人によると、タクシー運転手の職業病と一緒らしい。座り続ける暮らしの弊害である。

　何よりショックなのは、思ったほど仕事の能率が上がらないことだった。

　夜だけ書斎を使っていたころよりも劣るどころか、通勤電車や棚板を書斎にしていたころにさえ及ばない。一枚も書けないうちに日が暮れ、何をしていたか思い出せないことさえあった。どこか脳の血管でもつまっているのではと、本気で心配したものだ。

### ・「場所」の束縛

　おまけに、僕はもう一つ、この生活のおかしさに、気づいてしまっていた。十七年間のサラリーマン生活では、僕はもちろん、会社という「場所」に束縛されて生活してきた。晴れて自由業になったのだから、本来ならば「場所」に束縛されなくってもよいはずだ。どこででも仕事ができるはずだ。ところが、なぜか、「どこででも」どころか、サラリーマン時代よりもいっそう「書斎」という「場所」に縛られるようになってしまった。せっかく居場所の自由という、ヒトも羨む境遇を手に入れたというのに、それがほとんど活かせていないのだ。これのどこが「自由業」？

　本は相変わらず増え続けている。書評向けの本、献呈いただいた本、中でもスペースを食うのが執筆用の資料本である。僕はどうも「調べて書く」タイプの作家らしく、資料本の冊数は一作毎に倍々ペースで増え、三作目の『瑠璃の翼』ではついに二〇〇冊を越えた。せっかく建てた書庫も、これでは近いうちに溢れるだろうし、二〇〇冊の本を抱えてでも行かない限り、「どこででも」なんて夢物語にすぎない。書斎に縛られるというのは、資料に縛られることでもあるのだ。

「困ったなあ」

　居眠りから覚めた午前三時の書斎で、僕はつぶやいた。背中が痛い。

　誰を責めることもできない。わざわざ設計し、大金をつぎ込み、会社まで辞めて、僕はこの境遇に、喜び勇んで、頭から飛び込んできたのである。いまさら、もうこんな生活は嫌だ、とは言えない。僕と本のせいで二階三階で肩寄せ合って暮らしている家族から袋だたきに遭いそうだ。妻と老母と五歳児から袋だたきにされても死にはすまいが、父親の権威は完全に失墜する。

### ・「書斎」から「スーパー書斎」へ

　それに僕自身、まだ「書斎」に幻滅しきってはいない。書庫も書斎もできれば生涯に亘って使い続けたい。これまで二十回近く引っ越しを経験してきたけれど、あんな面倒なこと、もう二度とごめんだ。

　そこで知恵を絞ったあげく、「書斎」を拡大解釈することにした。快適な書斎ライフを実現する「スーパー書斎術」の数々は、こうして生まれたのだ。

　ここで、役だったのは、やはり、作家以前に培った、ＩＴのプロとしての経験だった。

　僕は「往路」ではソフトウェアの研究者だった。日本語や中国語のワープロも何機種か作った。最初にコンピュータに触れてから三十年になるから、まあベテランの域に達している。思い切って書斎に最先端のＩＴを持ち込み、従来の「書斎」の概念を根底から変えてしまえば、いま直面している行き詰まり感も打開できるのではないかと思った。

　正直に言うと、これにはやや躊躇もあった。会社時代とは違うことをやりたかったし、渋く和服でキメて、満寿屋の原稿用紙と太字の万年筆で「風のように書く」などという作家イメージに憧れてもいたからだ。けれど、そのイメージ通りに行かないから今の行き詰まりがあるわけで、思い切って新しい要素を外挿しなければ、がんじがらめのしがらみ、釣り合いに達したトレードオフ関係は変わらない。

　だから、とにかく試行錯誤してみた。ダメなら止めればよいだけだ。その中で、思ってもいなかった効果や、思い込んでいただけで実は本質的でない束縛などが、つぎつぎに見えてきた。ここでは、それらさまざまな試行の中から、状況を打開するのに特に役立った三つ――バーチャル書庫、ライティング・ブース、移動書斎――を紹介しよう。

○バーチャル書庫＝自家製電子図書館

### ・C+Iとはなにか

　パソコンを、計算機とか、清書機械と思っている人もまだいるだろうが、インターネットに接続された現在のパソコンは、それ自体が一つの伝達メディアである。このメディアのことを、僕は自分の講義では「Ｃ＋Ｉ（コンピューター＋インターネット）」と呼んでいる。Ｃ＋Ｉのメディアとしての最大の特質は、物事を物理的な実在から切り離して、バーチャル化（仮想化）するところにある。僕たち現代の書斎人は、Ｃ＋Ｉというバーチャルなメディアと、本や書類――つまり、紙というリアルな、マテリアルなメディアの二つと、常に接しているのである。その相互浸透の場が「書庫」だ。

### ・「バーチャル書庫」

　だから、ここはむしろ、発想を逆転して、リアル世界とバーチャル世界があり、「書庫」がその両方にまたがる、と考えてはどうだろうか。「書庫」を「リアル書庫」と「バーチャル書庫」の二本立てにするのである。

　「リアル書庫」は、作るのに金がかかり、本が増えてくれば溢れ、一定の場所に固定されている。これに対し「バーチャル書庫」は、比較的安価で、無限の容量があり、自由に持ち運べる。

　Ｃ＋Ｉがなかった時代、「リアル書庫」しかなかった時代には、知的生活者はそれを確保するための闘争に、かなりのエネルギーを割かなければならなかった。実際、学者や作家の中には、老舗旅館さながら、四方八方に増改築をくり返した迷路のような家に住んでおられる方がたくさんいらっしゃる。本の置き場所に困って、泣く泣く売ったり、捨てる場合もある。本を置く「場」が一つしかなければ、しかたがないのである。

　「バーチャル書庫」があれば、そうした悩みは一挙に解消する。「リアル書庫」から溢れた本は、電子化して「バーチャル書庫」に入れればよい。各自が経済的に可能な範囲でリアル書庫を作り、バーチャル書庫と併用すれば、せまい空間でも十分な知的活動ができる。僕が若いころにこのテクノロジーがなかったのが残念でならない。きっと二階の床も抜かずに済んだに違いない。

### ・本のバーチャル化

　本の「バーチャル化＝電子化」は、いとも簡単だ。だが、少しだけ設備投資が要る。「裁断機」と「ドキュメントスキャナー」――この二つはどうしても欠かせない。

　「裁断機」は、言わば本のギロチン。本や雑誌のノドをザックリ裁ち切り、紙の束にしてしまう。本や雑誌のバーチャル化に熱心なコミュニティ（そういうものがすでにある）の間で、絶大な支持を集めているのは、プラスのＰＫ－５１３という機種である。ずいぶん大きくてゴツいものだが、わずか二万円台で手に入る。

「えっ！　紙の本を裁断しちゃうんですか！」

　と、大抵の人は驚く。古本の鉄人kashiba氏に知られたら、連続殺人犯を見るような目で見られるであろう。だって、紙の本を生かして、いや、残しておいたんじゃ、バーチャル化のメリットはないではないか。これは、リアル世界の本にお亡くなりいただく代わりに、バーチャル世界で永遠の生命を獲得していただく、神聖な儀式なのだ。

　写真は、単行本を裁断しているところ。かく言う僕も、本好きのはしくれとして、最初はずいぶん抵抗を感じたが、すぐに慣れてしまった。ザックリと、一瞬でただの紙束になってしまう。なにやら薄笑いを浮かべているのは、嫌いな作家、仲の悪い作家の本を選んで処刑しているからではない。たぶん。

　紙束になってしまえば、バーチャル世界へは後一歩。「ドキュメントスキャナー」は、紙の両面を高速でスキャンし、書類をパソコンのファイルにしてくれる機械である。僕が使っている安い機種（キャノンのＤＲ－２０８０Ｃ）で十三万円台、企業向けの機種だと数十万はする。スキャナなら、わが家でも写真の読み込みに使っている、と言う方も多いだろうが、それはおそらく「フラットベッドスキャナー」というもので、今回の目的にはほとんど役立たない。一冊に一時間もかかったのでは、書斎のスペース以前に人生の時間がもったいない。「ドキュメントスキャナー」なら一冊が十分足らずでスキャンでき、その間もほとんど手がかからない。もちろん、作業を終えたら、紙束は捨ててしまう。かくして、一冊の本は、リアル世界からバーチャル世界へとその居場所を変える。

### ・バーチャル本はリアル本に勝る

　Acrobat PDF形式の電子化ドキュメントになったバーチャル本は、もちろん何冊あっても場所を取らない。整理もはるかに楽で、適当な名前のフォルダ（これが「本棚」に相当する）を作って放り込んでおけばよいし、専用のファイリング・ソフトを使えば、いくらでもきめ細かく整理ができる。一冊の本を、著者別とテーマ別など、複数の「本棚」に置くことだって可能だ。

　そもそも、気をつけないとすぐに書庫の暗がりに隠れてしまうリアル本と異なり、バーチャル本はさほど整理に気を使う必要さえない。「検索」は「バーチャル化」と同様、Ｃ＋Ｉの得意技だから。タイトルや著者で探したり、書いてある文章で探したりも、簡単にできる。

「太宰治の『水仙』の小説、なんてったっけ」

　なんて質問にも、たちどころに答えてくれる。「探し出す」ことにかけて、リアル本はバーチャル本に遠く及ばない。

### ・「パソコン画面で本は読めない」の嘘

　バーチャル本は、もちろんパソコンの画面で読む。二、三年もすれば、テレビや携帯用の読書端末でも読めるようになる。これまで、電子書籍が話題に上がる度に、「パソコン画面で本を読む気になんかならない」「やっぱり紙の本がよい」という否定論が大勢を占め、しかも、それがあたかも本の本質に関わる大問題のように言われてきたけれど、実は単にパソコンとディスプレイの性能が悪かっただけの話である。バーチャル書庫を持ち、パソコンで大量の本を読むと決めれば、紙の本より読みやすく、眼にやさしく表示する方法など、いくらでもある。

　僕の書斎のパソコンは、写真のように、本を読み、文章を書くことに特化した構成になっている。液晶ディスプレイは、開いた本のページのように、縦長に回転し、二枚を左右に並べる。画面は十分に広いから、ストレスなく読書ができる。新古書店で一〇〇円で買った黄ばんだ文庫本を、電子化し、ここで読んでいるときなど、新たな付加価値がついた実感さえ伴う。もちろん、紙で読みたければ自由で、読み終えたら電子化すればよい。

　バーチャル本には、紙の本同様、付箋を貼ることも、メモを書き込むこともできる。もちろん、そのメモを検索して、特定の本の特定の場所に行き着くこともできる。

### ・リアル本への愛着

　誤解しないでほしいのだが、僕は紙の本は不便だとか、バーチャル本が取って代わるべきだと言っているのではない。

　僕自身、いまでも、紙の本には人一倍の愛着を持っている。なんども読み返す大切な本や、装丁を楽しみたい本は、もちろんそのまま保存してある。でも、コレクターではない僕にとって、そんな本はせいぜい二、三千冊であり、リアル書庫に十分並べられる分量だ。もともと、何十年もの保存に耐えない紙質の文庫、新書、雑誌などは、どしどし、無限の容量を持つバーチャル書庫に移っていただこうと思っている。

　言葉を換えれば、バーチャル書庫とは、リアル書庫を一生快適に使い続けるための安全弁なのである。

　また、執筆中の作品のための資料本。これには案外高価なものも多いので、決断が要るけれど、原則としてすべてバーチャル本にして、ＤＶＤ－Ｒ（データ記録用ディスクの一種）に焼いてしまう。

### ・犯罪者にならないように注意

　いいことずくめのバーチャル本とバーチャル書庫だが、一つだけ注意しなければならないことがある。著作権の侵害である。

　自分が買った本を、自分のためにデジタル化すること――これにはもちろん何の問題もない。たとえ新古書店で買った本であっても。でも、バーチャル本のファイルを他人に渡したり、誰でもが持って行けるようにネット上に置いたりしてはいけない。図書館で借りた本をバーチャル化するのもいけない。各自の良識に照らして考えれば、難しいことはない。

　バーチャル書庫が実現したことで、僕にとって書庫の問題は最終的な解決を見た。そしてこれは、後で述べるように、「どこでも書斎」を実現する大前提なのだ。

## ○ライティング・ブース＝執筆スタイルを変える

### ・姿勢を変える

　バーチャル書庫のつぎに考えたのは、思ったほど能率が上がらない執筆スタイルを変えることだ。

　考えてみると、快適な書斎椅子に納まって机に向かった姿というのは、実はそれほど知的作業に適した姿勢ではない。

　やってみると分かるが、ボンヤリと何もしていない時間があったり、居眠りしてしまうこともある。つまり（傍点）、意識レベルはもともと高くない。

　また、エコノミークラス症候群というものがあるように、足先への血の巡りがよくない。つまり（傍点）、脳を含めた全身へも新鮮な血液がまわっていない。

### ・「ライティング・ブース」

　「座って書く」がダメならと考えたのが、「立って書く」ことで、そのために作ってみたのが「ライティング・ブース」である。これは僕の造語だから、他では通用しない。「テレフォン・ブース」からの連想だけど、実物を見た人もほとんどが「電話ボックスみたいですね」と言うから、この名前でよいのだろう。

　これはどういうものか、文章で説明するより、写真を見てもらった方が分かりやすい。

　床面積は九〇×九〇センチ（畳半畳）、高さは部屋の天井につかえないかぎり高くした。ブースの天井が低いと圧迫感があるからだ。入り口以外の三面には窓も作らない。入り口に扉をつけるかどうかは好きにすればよいが、密閉式にする場合には、換気はもちろん必要である。僕のは開放型である。ブースの作り自体は、電話ボックスより、試着室か、街角にある証明写真のハコに近い。床や壁などの内装は書斎と同じに仕上げた。壁紙がうまく貼れていないのはご愛敬。

　もうお分かりだろう。これは、立って仕事をするための道具、それも大道具である。

### ・試行錯誤の楽しさ

　ちょっと脱線するけれど、自分の知的生活のためのこうした道具を自分の手で作り出すのは、楽しい作業である。一から作らねばならなかった昔と違い、今はホームセンターなどで材料を指定の寸法に切ってくれるので、必要なのは「図面を引く」能力と、ちょっとした慣れだけだ。棚の一つも作ってみれば分かるけれど、これには図的思考とでも言うのか、言葉によらない思考を要する。ふだん言葉まみれになっている脳をリフレッシュしてくれる経験だ。

　さて、このブースには、公衆電話ではなく、パソコン一式が入っている。正確には、液晶ディスプレイ（ＬＣＤ）とキーボード、マウスなどの入力デバイスが箱の中に取り付けられている。キーボードやマウスは無線式のもので、箱の外にあるレシーバーと接続されている。ディスプレイは例によって「開いた本」スタイルの、縦置き二枚の組み合わせ。これが壁に開けた穴にはまりこむ。

　パソコン本体や、ハードディスク、安定化電源(UPS)は、ブースの屋根に載っている。騒音対策である。箱の中に音を出す機器がないため、静寂の中で執筆できる。

　ブースにはスイッチの類が一つもない。天井には照明があり、それが必要な季節には床暖房やエアコンもつくが、それらはディスプレイの表示とともに、人が中に入れば自動的に「オン」になり、出れば一定時間で消える。消し忘れがないだけでなく、そこに入りさえすれば瞬時に書きかけの文章が表示され、執筆が続けられる「待ち時間ゼロ」体勢は、執筆意欲をかきたてる上で絶大な効果がある。

　これを実現するために「人体センサ付電源リモコン」という小物を使った。同じ機能の製品がいくつかあるが、ここで使ったのは（株）堀場製作所の製品。照明用と同じサイズのリモコンに、人体を感知するセンサがついており、人間が近づくと赤外線信号を飛ばして専用コンセントをオンにする。前述のように画面、照明、空調の三つを、この「人体検知」コンセントにつないでいる。

　だが、「待ち時間ゼロ」を実現するには、逆に、パソコン本体やハードディスクなどは、年中無休――二十四時間・三百六十五日、点けっぱなしにしなければならない。電気代がかさまないよう、パソコンを自作する段階で省エネ設計を心がけたが、それよりも、停電やブレーカー飛びによる電源断や、落雷による破壊を防ぐため、これらの電源は安定化電源のコンセントにつないでいる。

### ・姿勢を変えることで得られたもの

　「座って書く」から「立って書く」にスタイルを変えることで、単に姿勢が変わっただけでなく、知的生産上の大変革がもたらされることは保証する。最大の効果は、仕事にリズムとスピード感が生まれることだ。まず、立っているだけで、血の巡りはずいぶんよくなる。僕はときどき、ここで仕事をしながら、ステッパー（運動器具）や足ツボ健康器を踏んだりする。ボンヤリしたり、まして眠ってしまうことなどない。つねにある程度の緊張感を保っていられる。

　このことに気づいていた人も少しはいて、英国首相チャーチルや、最近では米国国防長官ラムズフェルドは、立って仕事をしていた。世界最大のＣＰＵメーカーであるインテル社でも、立ったまま会議を行うルールだそうだ。

### ・セッション方式

　立っていれば、座っているよりはやはり疲れる。何時間もぶっ続けでパソコンの画面に向かい、キーボードを打ち続けるのはつらいだろうし、お奨めできない。一時間程度仕事をしたら、十分か十五分休み、一日に何度かそれを繰り返すというのがよい。勤務先でいわゆるＶＤＴ作業（ディスプレイ、キーボード等から成る機器を使用したデータ入力、文章作成・編集、プログラミング、監視などの作業）についている人はおなじみだろうが、このルールは、テクノストレス予防に望ましいとされている作業条件そのものだ。

　この一時間・一連続の作業を、僕は「セッション」と呼んでいる。好きな時間に四回のセッションをこなせば、一日の執筆作業は十分にこなせる。

### ・書かずにしゃべる

　ライティング・ブースは、理想的な口述筆記環境でもある。家族といえども、人前で原稿を口述するのは、気後れしてしまうが、ここだと誰にも聞かれないことが保証されるから、慣れれば、いくらでも口述で原稿が書ける。

　ここで「口述筆記」とは、何もブースに秘書を同伴すると言うのではなく（それも楽しそうだけど）、音声認識ソフトを使って、しゃべったことを自動的にテキストデータとして入力することを指す。数年前までは認識精度も悪く、とてもお奨めできなかったが、今では認識技術の進歩と、パソコン性能の向上で、キーボードと並ぶ第二の入力手段として十分に使える。最初に思いついたことは音声で入力し、文章を推敲する時はキーボードを使うのが、僕の方法である。音声認識ソフトはマイクまで付属したものが一万円くらいだから、難しく考えず、まずは試してみて、自分に合わないと思ったらやめればよいだけ。僕も使っているスキャンソフト社の「ドラゴンスピーチ」、日本ＩＢＭ社の「ＶｉａＶｏｉｃｅ」などが代表的な製品である。

　ライティング・ブースは、書斎空間をまだ確保できない人にもお奨めできる。いきなりここにあげた本格的なものを製作するのを躊躇する人は、山之口に騙されたと思って、取り敢えず立って書いてみてはどうだろうか。本棚の適当な高さの段を使えば、この感覚を試してみることができる。

　僕自身、執筆スタイルを変えて後悔したことは一つもない。息子に「電車でＧＯ!」を一度だけやらせたら、しげしげと侵入してくるようになっちゃったことくらいである。

## ○移動書斎＝地球のどこでもが書斎

### ・「歩きながら書く」が理想

　もちろん、仕事のスタイルはこれだけではない。「立って書く」の他にも、試してみたいことはいろいろある。

　たとえば、「歩きながら書く」こともその一つ。人間は先を急いでいるのでもないかぎり、自分にとってもっとも心地よいリズムで歩いているはずで、そのリズムにのって考え事をするのは案外、合理的なのではないか。

　歩きながらものを書くなんて不自然だという人がいるかもしれないが、人類はもともと、森や草原を歩き回っていたのであり、そこに「文字を書く」という、それこそ不自然な作業を新たに課せられたのである。その不自然な作業は、紙と筆記用具を必要とし、さらには紙を載せる机に人間をしばりつけた。

　だからこそ「書く」という不自然を「歩く」という自然にとりこみ、マッチさせる試みは、やる価値があると思う。いまはまだ機が熟していないが、五年も経てば、軽快に着て歩ける「ウェアラブル・コンピュータ」が必ず登場するし、そうなれば、「歩きながら書く」というのは、まったく自然な行為になるだろう。

　ちなみに、本を読むのは、バーチャル本のところで書いたように、やはり「座って読む」に軍配が上がる。紙の本なら「寝て読む」というのも昔からの定番だ。

### ・「どこでも書斎」へ

　さて、このように、「書斎」をさまざまに拡大解釈していくと、やがて「自分のいるところがこれ書斎」という「どこでも書斎」の考え方に行き着く。

　冒頭で述べた、書斎引きこもり生活への反動だろう。僕は無性に外に飛び出したくなった。週に二日、大学で講義のある日には、兼業作家のころみたいに、電車で書いたりもしているけれど、もっと、自由業として得た「居場所の自由」を謳歌し、それを象徴する道具が欲しくなったのだ。

　そのために発想したのが「移動書斎」である。つまり、クルマを「書斎」として捉え、そのために必要な機能をふんだんに詰め込んだらどうなるかを追求してみたのだ。もちろん、実現したときの効果も大きいけれど、それを追求する試行錯誤もまた楽しい。

　クルマで外に飛び出し、自然の中で執筆することが、いままでできなかったのは、本質的な理由ではなく、純粋に技術的な理由であり、つまり大量の資料本と、書斎の執筆環境に縛られていたのだ。資料がバーチャル書庫に収まり、ＤＶＤ一枚で持ち歩けるようになった以上、快適な執筆環境がクルマにもあれば、今すぐにでも飛び出せる。

　家族を連れていくのも楽しい。一日に一定の執筆時間さえ取れるなら、家族サービスと仕事は一緒になる。運転を妻と交代でやれば、移動中だって仕事はできる。

　移動書斎のプランを、誘惑も交えて、わかりやすく説明したら、妻の賛同を得た。ここは大事なポイント。ひとりよがりで進めたことはたいがい挫折するし、運転も分担してもらえない。ちょうど息子が外遊びの年齢になったのも、ワゴン車を買う追い風になった。そうなれば、あとは実行あるのみだ。

　移動書斎に欠かせない条件は、つぎのようなものだ。

・普段使いのクルマと兼用できる――いわゆるキャンピング・カーは、居住性こそいいが高価だし、駐車場所もない。クルマを二台持つほどの経済的余裕もない。

・書斎と同等以上の快適さで執筆ができる――普通に仕事ができるくらいのテーブルと椅子を、クルマの居住空間に作り込める。

・親子三人で車中泊ができる――最前列以外のシートが完全にフラットになる車種でないと難しい。

・オートキャンプ場などで普通に生活できる設備――冷蔵庫や照明、空調、調理器具など。

・インターネット接続環境――これは携帯電話で容易に実現できる。

　これらの条件をもとに選んだ車種は、ホンダのステップワゴンだ。三列あるシートの二列目が倒れてテーブルになる。そこに振動対策を兼ねた自作のテーブルを作り、パソコン一式を持ち込んだ。写真はノートパソコンだが、普段は書斎のパソコンと同じ、自作のキューブ・パソコンを持ち込む。

### ・移動書斎一号

　かくして今年二月、山之口家の「移動書斎一号」は鮮やかにデビューした！

　いまのブームは、秩父や坂東の札所巡りと、オートキャンプ場で自炊しながらの執筆である。移動書斎の側面に差し掛け式のテント（カーサイド・リビングという商品名だった）を張り、カウボーイよろしく、焚き火にダッチ・オーブンをかけ、料理ができるのを待ちながら仕事をするのは、ことのほか楽しい。早朝の散策もすがすがしい。自然の中での知的作業は、脳に適度な刺激が加わるためか、捗ること請け合いだ。第一、引きこもり生活よりはるかに健康によい。

　クルマの中だからと妥協や遠慮をせず、あくまで書斎としての機能と居住性を追求したことが、結局、よかったのだろう。

　アウトドア生活の基本は、無理をしないこと。快適になるために外に飛び出したのだから、どこかであてがはずれた場合は、意地を張らず、当初の計画をしなやかに変更してよい。たとえばクルマで快適に寝泊まりできる条件が整わないなら、ホテルに泊まればよいし、もともと全日程を「車中泊」にする必要もない。家族を連れてゆくときはとくに、無理をせず、楽しく過ごせる範囲でクルマ暮らしを楽しむことにしている。

　移動書斎の利点は、それだけではない。われわれ小説家をはじめ、現地取材を必要とする仕事に、とくに威力を発揮するのだ。

　小説家の取材旅行では、現地で見聞きしたことを手帳などにメモしておき、自宅で執筆する際にそれを参考にしたり、材料にする。泊まったホテルで文章に起こすこともある。移動書斎を使うと、この取材旅行も様変わりする。現地で見聞きしたことは、基本的にその場で文章化する。材料を仕入れてからのタイムラグが限りなくゼロに近いから、なによりも印象の鮮度が違う。移動書斎での取材を体験してしまうと、あまりの快適さに、元の生活に戻れなくなる。

　移動書斎は、あくまで試験運用中だから、まだ隠された利点や楽しさがあるかもしれない。いずれ機会があれば、報告するつもりである。

　　　　　●　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　●

## ・「書く」ためのIT

　ものを書くという目的を中心に据え、ＩＴの助けを借りて「書斎」や「書庫」をあれこれ検討してみると、それが知的生活のフィールドを一変する可能性を秘めていることに気づく。いままでの、狭義のＩＴは、使用者を家に縛りつけることにむしろ手を貸してきたが、自分の生活習慣に合わせてうまくＩＴを設計し、自ら手を動かして実現すれば、知的生活は屋内から解放されてアウトドアにも広がってゆく。「スーパー書斎」と呼ぶゆえんだ。

　これはすばらしい。日本中、いや、地球のどこでもがあなたの書斎になるのだ。

　少なくとも僕は、ようやく手に入れたこの巨大な自由を、二度と手離す気はない。